

柳亭叢書全部總目錄

第一輯

○ 應 談 覺 之 夢 全十五回讀切
○ 松 製 操 の 色 第一回より 五回迄

第二輯

○ 松 製 後 篇 第六回讀切
○ 一 舍 時 雨 の 笠 森 第二回より 十六回迄

第三輯

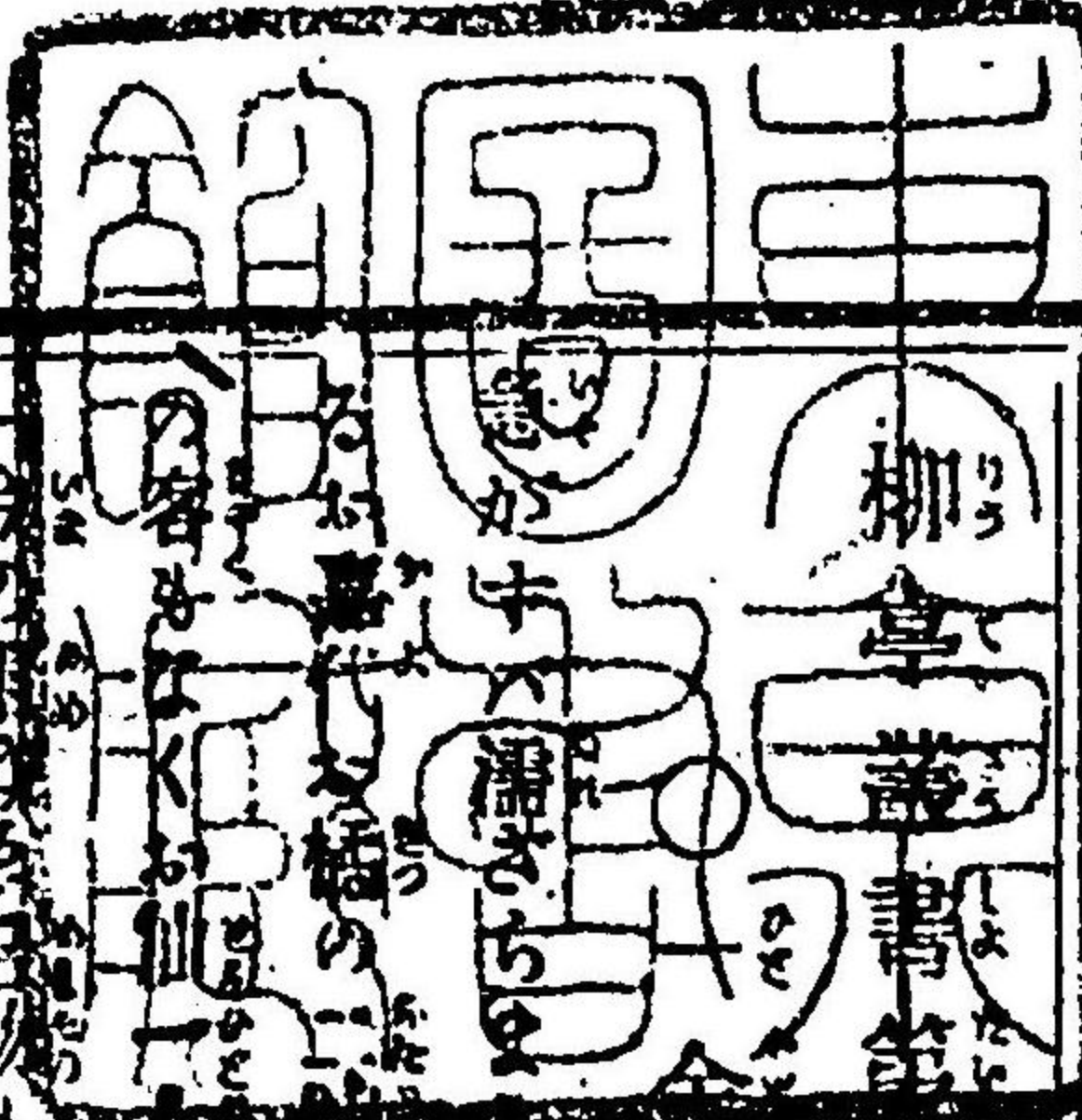
○ 時 雨 の 笠 森 後 篇 第十七回より 廿回讀切
○ 倚 岸 夜 半 の 白 波 第一回より 七回迄

第四輯

○ 夜 半 の 白 波 後 篇 第八回より 十回讀切
○ 唐 紅 塵 之 杜 鵑 花 第一回より 十三回迄

第五輯

○ 時 雨 之 杜 鵑 花 後 篇 第十四回より 廿回讀切
○ 袖 少 浦 餘 波 大 潮 全八回讀切



柳亭叢書第三輯

時雨笠森

第十七回

東部

柳亭種彦著

旅人の跡より晴るを詠じけむ道漣山も程近き谷中に於て白雨に遭た
 女足の抄どらす漸にして鍵屋の店へ來りし頃の日も落し他に參詣
 が店先と片付るたる時なりしが素より客に愛想よきお仙の顔も媚媚に
 一今の雨の石物も大ぶん濡て嘸難儀外にお客も座りませねハ身帯を解なされて
 火鉢で少し乾かしてお出なされと懇篤に世辭も賢く汲て出す茶碗をお嘉代の採ながら差出
 す黒の塗盆に寫るお仙とお橋が面を一度に屹度見合せて「チモマア好似た二人の容貌お橋
 ハ田舎有故粧色も野暮なり色も黒く美人と世間で評判のお仙どのに併立バねど眼元鼻筋
 唇の薄くて前齒の細さまでが瓜を割たといふやうな二女の面を斯う一ツに寫せば如何や
 ら姉妹でないかと思ふ心當りガ此方にないでもなければも他人の虚似といふ賢へもあ
 れバ若違ふたら死して下されお仙どの貴嬢ハ播州姫路の人でナ坂に居た忠右衛門といふ人

の娘にて有馬の湯場で幼いとき災難
 に遭た覺ゆのないかと聞て愕然手に
 持し盆をのつたど脱落し「成程それ
 の仰やる通り貴君方へ又如何なされ
 て吾儕の素性を存じかど膝と進め
 て問詰ればお嘉代へ涙と拭ひつゝ、
 「貴嬢の妹のある事を今まで夢にも
 知るまいが、實父の市助どのが亡な
 る日迄も貴嬢の事を苦勞にしてゐた
 お仙どのかコンくお橋此人がおま
 への姉様ぢやぞいのトははる、仔細
 と知らざればお仙の夢の如くにて吾儕に妹の



なん苦と思
 ふての
 たに此
 嬢様を
 妹と仰
 する
 而已な
 らず亡
 なつた
 市助と
 のと仰
 する

からの日頃から會た見たれど焦れてゐたお父さんの其後に此嬢が出来て死んでかど先だ
 つ物の涙なる仔細と委しく尋んと膝を進むる折しもわれ先頃金を與へたる女乞食の鍵屋の
 店へ要事あり氣に來か、りしが客前をバ憚りて投費の後へ身を隠しお嘉代とお仙が問答
 に耳を縫て聞居たり

○第十八回

其時お嘉代の容儀を改め「仔細を話さず突然に姉と妹といはれての不審に思ふの最も全極
 貴嬢が有馬で災難に遭ふて別れた父さまの忠右衛門殿の後妻のお嘉代といふの私が事話す
 も涙の種ながら其の斯々云々と奥平家の溜十今村丈之進が情あ因て忠右衛門の同僚の足輕
 松嶋家の入夫となり市助と改名しお橋を生して死去せし事より臨終の際までお仙が事を心
 に懸て慕ひしに依りお嘉代の女のお橋と共に丹下に徙ひ江戸屋敷へ下向したるを幸ひに大
 都會の事なれば若やお仙が生死の程を聞知る便もあらんかど密々尋ねたる事迄漏さず語聞
 せければお仙の始終を聞く事毎に涙に袖を浸しつ、「昔の年來吾儕も生死の程を氣遣しお

父さんの武家方へ執立られて妹迄出来たの目出度果報餘つて過去られたの最惜い今迄無事
 で在たなら親子姉妹打揃ふて此對面を祝はふに便ない身の履歴をも一通り聞て下されど
 實母おりのが姦通をたる六藏と逃亡せしより不幸續きて忠右衛門が病を治せむとお仙を伴
 ひ有馬の湯治へ趣く途中六甲山にて賊に出會ひお仙が深間へ蹴落されしを助けし養父鍵屋
 太兵衛の非義非道の悪人にて尋る親に面會させず桶川宿の五兵衛が前へ生長する迄預けら
 れし五兵衛夫婦も騙り科にて遠嶋に處せられし後に江戸へ來りて笠森の茶汲女になりたる
 事より太兵衛の重き癪病に罹ながらも悪業止す別當所の金を盗み剩へお仙に追々孝子を
 苦めたる上に發狂して死たれば親に刃向ふ疑ひと蒙り町奉行所へ引れしより却て日頃の孝
 心顯れ漸く此頃出動せし長物語の顛末を洩す事なく語ければ百ひに奇遇を感じつ、お嘉代
 の尙も膝を進め「貴嬢をお橘の姉さんぞ知らぬ間こそ内心の鬼やら蛇やらと覺もしたが腹
 の異れとお橘の姉と聞べ今まで憎むたが面目ないと云へに云ぬお橘も姉姉を愧ぢ美俯向
 て在ければ「おさつ様お姉様と知らずで怨むで居とあるの此頃吾儕が此最負を共に度々來

臨のある丹下様と吾儕どが内情でも有と疑
 ふて大切の旦那を欺しもあるかと思召ての
 お怨恨か其事ならば今爰の笠森稻荷の神誓
 て唯此最負にあるまでなれば如何ぞ安心な
 されてと雲らぬ詞に疑ひの夕陽天どもに晴
 めきてお嘉代はますく堅固なるお仙が志操
 を賞しけり

○第十九回

お嘉代とお仙が過來話し茶店の後に立聞せし婦乞
 食の思ひずも「ワット一聲泣出せば驚き振
 向くお仙が裾に身の穢さも打忘れ絶付て涙
 にくれ「ア、恥かしいく此体をして娘と



いひ憎けれ先達ても貴儀の方での實の母と察すればこそ金と恵み雨の降日の夕方に來れば問たい事が有との詞に任せて此方でも若や夫かと思ふにつけ雨の降日の晩方に幾度となく來て見れ生憎會ぬ其故の親殺しとやら親孝行とやらの騒ぎに付て裁判所へ留られたとかの評判の虚か實か聞れさふと思へ迄斯る身を取て盡間の近所へ來もせねど今日はからずも白雨に日も暮か、る仕舞際他に聞く人もないならば母といふのも氣の毒ながら是迄の罪と詫び忠右衛門殿も一所にかど聞ふと思ふて松島の未亡人の話しに引續きお仙が年來艱難の中でも悪い養父に孝を盡した忠操を聞て彌々此身を愧穴へも這入たい思ひと面も冠らず出て來た幼い時から艱難させたま皆此かのが悪いゆゑ重なる罪を詫入る丁簡我子ながらも是此通り手を合せて拜みます如何を堪忍して下されど大地にひれ伏し悔歎けば孝心厚きお仙も多穢き母の襁褓に取つき「過去た事の夫迄にていふて飯らぬ詫に及ばぬお懐愛やと手を探してともに泣入る實母實子異母の姉妹後家同士が八ツの袂を絞りしに實に不思議の奇遇にて是も年來信仰せし笠森稻荷の應驗ならむと各々社殿を伏拜み喜び涙に哽びたる

長物語は日の暮し闇と便に見苦しきおかの夕衣服を脱捨させお仙が着換の浴衣を與へて其夜密に三崎の住居へ連れて戻りければお嘉代のおさつを伴て屋敷に歸り有し次第を丹下に委しく物語れば丹下の夢の變たる如く親族再會の奇遇と感じ僥倖しておさつが姉と契さりしを可なりとし是よりおさつを本妻の如くに愛してお仙とも同胞の如く交りしがおかの老ての難病に幾その艱苦を重ねしうへお仙に會たる喜びにて氣振のせしや



三崎へ引取られたる三日目に遂に空しく成ければ孝心無類のお仙も頻りに歎き悲めるを丹下の種々の慰めて佛事の費用も多分に贈り福

泉院へ埋葬して跡懸ろに吊ひけり

○第二十回

今村丹下いまむらたんげの若年わやくねんながら父丈之進ちちぢゆうのしんが性質せいしやうに似て慈善じぜんの心深こゝろふかかりければお仙せんが養父やうふ太兵衛たへいゑの爲ために幼年わうねんよりして苦くるめられ偶實たまたま母ははありのに遇あひしが幾日いくひもあらず死したればお仙せんが便たよりなきを深ふかく憐あはれみ茶店ちやんてんを引ひかせて相應さうおうの縁ゆかりに附つんど計はかりしがお仙せんの長ながき歳としづき月つきと一日いちにちたりとも安やすんせす難がた苦くるを嘗かめて育そだたられば尋常じんじやうの商家しやうかなんぞお嫁かよして家事かじの苦勞くろうと爲なんより養父やうふと言實いひじつ母ははと言心良こゝろよからず生涯しやうがいのを果はたし、も亦身またみに係かる宿業しゆくごふならんと思おもふにぞ二個ふたごか菩提ぼだいを吊ぶらふ爲ために尼あまにならんと望のぞめるを丹下たんげは種々さまざま慰なぐさめ諭さとし難がた髪かみの念ねんと漸やうやうく止とめて猶笠森なほかさもりの茶店ちやんてんに在ありしが今村丹下いまむらたんげも江戸表えどおもてに三ヶ年さんねんの在勤ざいじんを



果し中津へ歸國の命を得れば

つ母子おぼこを従したがへて歸かへると聞きくよりお仙せんもどもに實父じつふの墓はかに伴ともひてよと望のぞむに任せ住駒すまがはし江戸えどを旅たび立て大坂表おほさかおもてに五六日ごろうじつ滯留とどりしつ、其許そここゝ道許みちづらと見物けんぶつをさするうちお仙せんの幼せうかりしとき大坂市中おほさかぢやうちゆうを四里餘よほほ隔へし眞上村まみかむらの農家のうかある米澤某氏方よねざらにやうしにむかひへ里さとに遣やりて養育やういくされし昔むかしの恩おんを忘れねば丹下たんげに乞こふて眞上村まみかむらへ赴かつ、其家そのいへと訪たずねばお仙せんを育そだて夫婦ふうふの者ものの年とし老おたれども健康けんかうにてお仙せんが假かりに兄あにと稱なづへし倅喜助せきすけも年とし長ながて篤實とくじつ温行おんかうなる者ものなれば農事のうじを勵むみて家産かさんを殖ふし雇夫へいふをも五六人ごはにん石俵いしひら人ひととなりたれども良縁りやうゑんなくして今迄いまいも定さだまる妻つまの無なりければお仙せんを嫁よめに異ちがよといふ志人夫婦しにんふうふが強たての頼たのみにお仙せんも昔むかしの忍しのまれて身一人みひとり江戸えどに立戻たちもどり愛年月あいねんげつを送おくらむよりの鞆田舎たづのいなかにすま居ゐして安樂あんらくに生涯しやうがいのを過すごさんといふ願ねがひに依より縁談ゆかりだんに整ととのひて一度中津いちぢゆうへ掛かきて父ちちの墓はか、果はたし、後のちに



丹下のおきつを本妻とし妹夫婦の媒約にてお仙の喜助の妻となり男女多の子を儲けお指
家富榮ゆしがおけんの意に思ふ様多年苦の間に慈善好み報いにや思ひがけなり天
縁にて斯る家家の妻となり衆の小兒が痘瘡も懼く濟し、面己ならず胎毒なんどの患ひな
さも笠森稻荷の應護に因り住居近くへ社を營み且暮に敬拜せばやと志願の旨を真大に語り
遂に一社を建立せしり今尙同村中に在り靈驗廣大なりと語り却説江戸谷中天王寺中の稲泉
所に安置せし笠森稻荷大明神の本体立木の御音なれば維新以降唯天竺と改稱ありて明
治四年天王寺を始めとし境内五ヶ寺を廢せらるゝに臨み寄近き上野櫻木町なる齋院へ笠
森の本尊を遷せしに信心の輩衆を以て毎年八月廿二日その祭典を執行ひ彌々繁昌する
ぞかや此物語の記を種彦器を有馬の温泉より大坂府下に再遊して島上郡眞上村に笠森稻
荷の在りを知り併におせんが履歴を請ふに由ふる所と大いに異を以て其眞なる行
ハを實し幼婦の顔鑑となさむとす左れば明和安永の頃江戸の流行唄に「お稲荷さんへ一錢
あげてお渡引もでおせんのお茶屋へ寄ればお茶を出てお茶のみく横白で見れば米

の團子か泥の團子かおだんどく」と此頃百有餘年の今日迄尙人口に膾炙するハ獨笠森稻
荷の靈驗ありしのみならずおせんが有名なる故にて實に稱世の美人といふべし

○倚岸夜半の白浪 第一回

我袖を野への草葉にくらべてもあらぬ露こそ置まさりけれと家長朝臣が詠じたる歌の意も
身にしみて昨日にけんと疲細る尾花に暮の秋見ゆて未暮すらぬ家内の不熟を左や右氣遣ふ
一個の商人肩に旅荷とかけまくも鹿嶋の神の守札受て歸るも常陸帯ひすびて解ぬ女夫同士
親子の中も吉岡と祝ふて急ぐ原中の撥押わけて顯れ出る二個の盜賊白刃を振ひらめかして
商人が行先の方に立塞り「見かけた處が成田から香取へかけて遊山の歸り旅費の残りハい
ふ迄もなく身ぐるを脱で出せばよし否と辭せば是非がなれ荒い所業をして成と乾あがる腹
と肥さねばならぬと云ば又一賊が「續いた秋の霖雨に懐中の金満さうな奴も通らぬ原中住
居久しく滋味も喰ねば此野に育つ馬同様に疲て力もない所へ出會したや因果と詮らめ疾々

渡してまやアがれト突出す刃に身を戦ひせ「マア」待て下さいまし斯う前後から取圍
 れてハ脱も隠れもされぬ原中命に換る物なければお望次第に差上ませうが此荷の中に
 銚子縮の織元ハ拂ふて来た仕切金の受取と鹿島のお札がござりますすが如何ぞ是だけ我等に
 下さると思召お慈悲にお戻し下さいとハども発さぬ盗人等の阿々ど打笑ひ「慈悲といふ
 字を知る程なら追剽渡世をしてハぬ荷を改めて品々を撰分るのハ面倒だ愚痴ハ云すと
 渡してまやへと抱へし行李と奪掠る其隙に一個の賊ハ手早く帯を解せつ、衣服を剝うち向
 ふより駕を揺せて五六人来る者あるに驚き周章て緋絆一重を身に殘し仕合よしと目と眼を
 見合せ荆棘の中へ遁入たり折から爰へ捲来る旅乗物の内ある位ある寺院の住職にや青侍
 二人を従へ通りか、れば彼商人ハ駕に從ふ侍につき「我等ハ御覽の通り唯今此野で賊に出
 ろひ旅費ハ素より衣服を剝れ緋絆一重に成ましたが秋といへど八月下旬膚が寒くて歩行
 れませず殊に此野の旅籠さへ失ひましてハ木賃宿へ泊る事さへ出来ぬ時宜とあつて赤裸で
 野宿もならず此難澁をお察しあつて聊ばかりの御合力を偏にお願ひやますと地にひれ伏

て請ふ体を駕の内より見たりけん
 「駕を下せと聲かけて徐々出る上
 人は頭巾に頂を深く包み「容子の
 委細承まつたが此廣野で盜賊に
 出會れたとハ氣の毒千万人を救ふ
 ハ出家の義務失禮ながら此下着と
 一重足下に進せやうと袈裟衣の紐
 解て下に着込し白羽二重の單物に
 金二分を添へ「旅中でなくハ如何
 様どもお救ひや手段もあらぶが拙
 僧とても急ぎの程中心ハウりの合
 力なれど此二品と受納されよと出



すを採て押頂ら「旅費を下さるのみならず御衣服までも御恵みなさるの世にいふ地獄で淨
屠氏の御恩一生忘れの致しませぬ御蔭で江戸へ歸り次第追てお禮に出ませぬが御寺の何方
でござりますと問は上人頭をふり「イヤ其謝儀の無用く出家か人と助るの思わ報る、
爲でいござらぬ今拙僧に救われたを佛の御恩と心得て信心とよく致されよ御縁もあらば又
重てお目に懸るで御座らうと寺も其名も明さずして日も斜なる天と仰ぎ「最早暮るの間も
わるまひ次の宿まで乗物と急いで遣れと夕鴉の啼もどむる原中を飛か如くに馳し跡見お
くりて商人の両手を合せ伏拜み力なく立上り江戸の方へと歩行をはこびぬ

○ 第二回

「汝の女房お圖じやないか叔母さまと建立て大きな風呂しり包をもち何處へ行くと聲かけ
れバ「サ、良人清吉さんか能とこまで逢ました吾仙の貴殿の留守の間は去られて本所の
實家へ今行とこでござりますと聞て驚く清吉「然しふ事と聞えらす姑御の心も和ら
いで陸ましふ暮せるやう今度の旅行を幸ひに鹿島香取の神々や成田の不動舟橋の太神宮へ

参詣し家内安全安産のお守札まで頂戴て来た甲斐もなし此爲体の如何した事かと問ふ傍か
ら叔母の包を背負た儘清吉の前へ差出「サッ白白くお去だが人の口には口が建られぬ此
頃余所での風聞に金吉屋の養子清吉の養母と姦通で可哀や嫁を出よがしに苦役るさうな
と聞ましたが熱れバそんな事もあらうも知れぬ不和合の此子も寔心可愛さうに強面
い目をしてうらより貧困ながらも貧母のうちにある方が増であらうと今度の離縁を僥倖
に一言の詫言す今連れて戻る所なれば委細の事は跡々から緩々と懸合ませう何とゆふにも
此處の往來殊に船の揚場ゆゑ立てては妨になるサア早く行ませうお圖の何を泣て
ゐるサア其包を船へ乗など急立てお圖の手とどり行んとすれ清吉の叔母の前へ立寄り袖
をとらへて引戻し「マアく待て下さいまし小生が養母と姦行があるゆゑに同意に成て女
房と追出すのかと思召すお疑ひの途方もない事小生において斯な醜行の微塵もないの女
房のお圖が確に知て居ます如何に姑の權威なりやとて肝心の良夫の留守に嫁を去とは聞ぬ
所置とゆふ主と親には勝れぬ是には深い容子があらうが一体是のマア何して去れる計に

成たのだと聞かぬ顔の顔をあげ「今更いはずと御存知の起臥善の上下して口喧しいお姑
 んが一昨日吾儕が洗湯から歸り化粧をしてゐる時に御客が大勢都合ふたれば忙し
 化粧に油を賣り返々してゐる此体で商人の女房に成遂られぬと殿しい折檻それ
 山に言立おまへの留守を僕等に離縁と極て相談整へ叔母さんを呼寄てサア即刻一所に連て
 戻れと引渡された悲しさを推量して下されどいひさして又潸然と泣入と見て何事ぞと出遣
 入繁さ船場の人の立に耻入る清吉の「サア泣てゐては往來の人たち々怪むで暫々ど見てゐ
 るから向ふの茶屋へ腰を掛け向かの容子と問ませうと小網町の河岸にある技藝張の茶店へ
 立寄り「小生が御命の續くし
 を叔母さまも聞て察して下され
 どいふのり兼て知る通り舊の桑
 名の藩中の武士の次男であつた
 れど幼稚時から短氣性で十二の



歳の初午の稻荷祭に小供同士大
 勢遊んでゐたらちに不斗した事
 の争ひから喧嘩をはじめて相手
 の兒に脇指で傷をつけたゆゑ實
 母が大ろう心配し氣の暴い兒を
 武家で置いてい末々如何も心得違
 ひとまでかさうかも知れぬとて
 金井屋へ養子にやられ今年で調
 度十餘年永の月日と置しい養母
 の機嫌をとりおはせ商業の道も



漸やく覺えお園と貫て以降り別して殿さま母の小言姑か嫁と呵るの常どいへ入るそれ
 へく口似なく毒々しく叱り懲と怖ろしき傍で見てさへ氣の毒で不便でならぬ程なれば

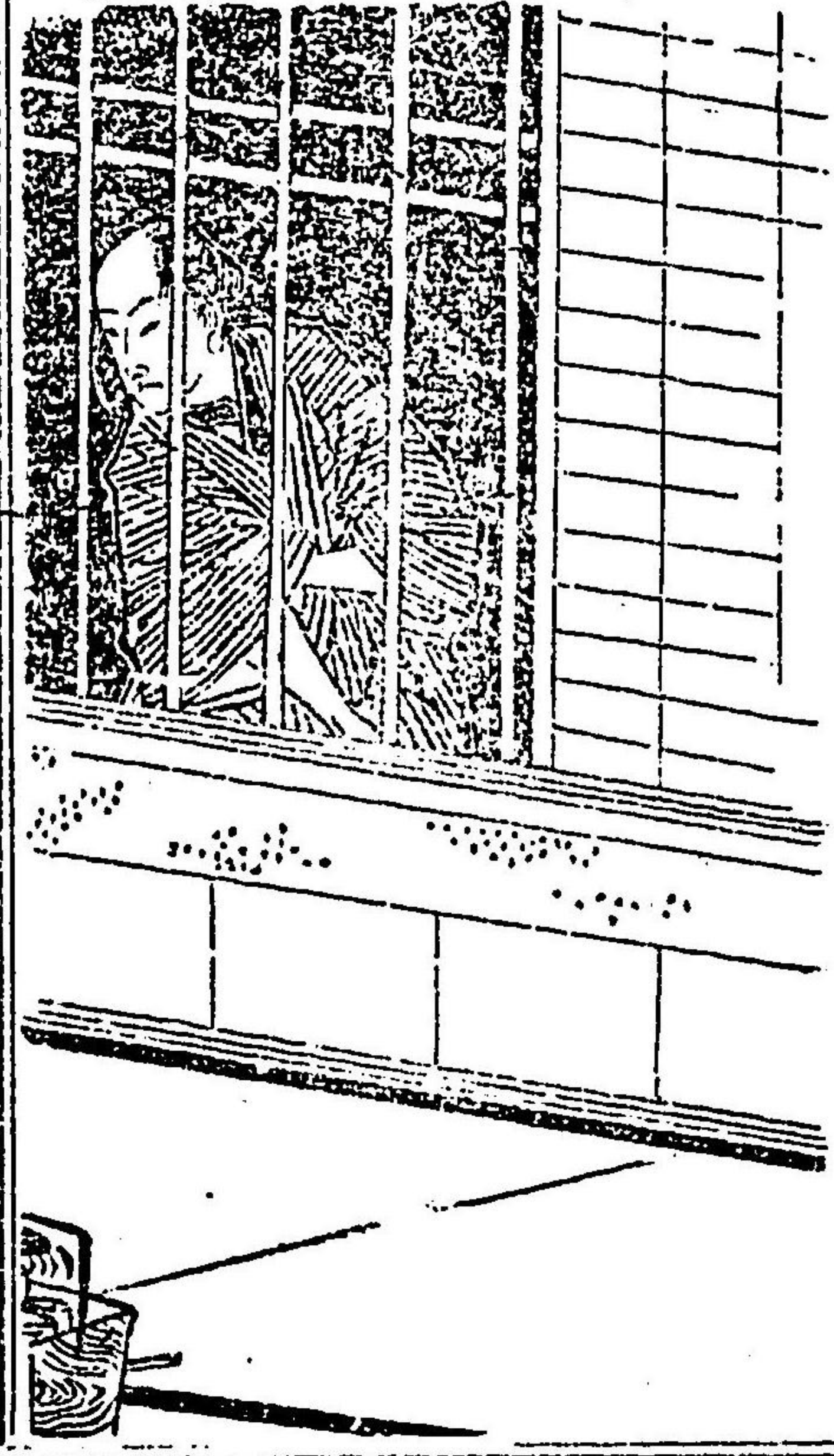
孝公人や近所での御内蔵との呼ぶ者もなく金井屋の鬼婆で通つてゐるとの情ない噫如何し
てお心の和らぐ法のあるまいか是ではお園も無強面からう迎も末々平防のまどげられない
縁ならば一ツも年の若いうち相對づくで出さうかと思案にくれてゐるうちに月の經水も止
たとやら切られぬ縁なら養母の心を少しも優しくさせ波風立ずに納るやうにと神や佛をお
願ひ申し銚子縮の織元へ詭物の資金を渡し成田へ進る間の驛吉岡の原中で強盗に出會し丸
裸にされたれば途方お暮てゐるところへ何處やらの有がたい和尙様が御通行なされてお召
の下着と二百匹の金を恵むで下されたれば其お蔭で漸々と佐倉の町まで来たれども白い着
物で旅行も出来ねば其羽二重を賣拂ひ木綿布子と買換て行徳から乗合船に乗て戻つた揚樓
で留守に去れた女房に逢とは此身の運の極め重々の難澁を如何ぞ察して下これと男涙は哽
びしの道理せめて憫然なり

◎ 第三回

清吉が長物語をさゝゐる叔母のまだ解ぬ怨にせまる涙とうかめ「だんくのむ話しを聞は

寢にお氣の毒事でのわれと清吉さんお園が身にも成て見て下され可愛さうに姑御の口さ
がなく阿憊して執憎の機嫌とそこねす是までも辛防した何故であらう貴郎の優しくして
下さる夫ばかりと樂みに暮す女房に口を出して最負こそ出来まともい影にあり日向
になり兩親のまへと能やうに取繕ふて下されても不孝といふでもあるまいし世間で笑ひも
しまいければ難儀をするの此女ばかり又斯ういふて何とやら身最負をするやうなれど
貧乏人の娘にしての手も相應に書ますし縫物の絹布羽織も仕立るほどの事お店での御不用
なれど三味線も能く弾ますし人愛もよし標致とても望むでおもらひなされた通り落目をい
へば花美すぎれば若い時の二度のないから左のみ無理での有ますまいと怨めばお園の傍ら
より「叔母さんか然う仰しやれば眞人が吾儕にの些も構ひぬやうなれど必ずさうでござ
りませぬ勝手どもに心切にして下さりますければ何と何をいふにもむつかしいお姑さんの事
なれば貴郎が今度の災難をもやかましく云立て何かに附て吾儕をば内へ置ない筈段をされ
るの必定是のま何たる因果の寄合やら此世の縁が薄ければ未來で長く添ふ了簡でござり

ますると清吉を昵と見やりし眼のうちには恨と戀の二瀬川満來る潮をなみたなる清吉の只願に洩息のみしてゐたりしが「此所で何時まで歎いてゐても一端去れた女房を討らず途中で會たとして一所に連れて戻れまいから先一端の本所の實家へ行がよいといふもの、活計に困る實母の許へやるのも氣に毒なれば御迷惑であらうけれど叔母様が淺草の御宅へ四五日お園の躰を預つて下さらぬり左すれば宅へ歸つたらへ養父の人も知る通りの善良人で信心者なれば講中の衆を頼みお園が再度戻れるやうに養父母を執こしらへ託を入れて見ませうから此方に無理なけれども其託事を聽入て呉れば舊の夫婦となりお園の母にも悪耳を聞せず遂まふといふもの長い事と



サませぬの指折かぞへて「今日十六日なれば中三日経て廿日まで五日の間だ預つて下さるなら首尾を繕ひお宅へ御左右をまませうから如何ぞ夫までナフお園「講中衆が仲裁で舊のやうに治まる事なら此な嬉しい事はない殊にわか男さんの甥子三平さんが店の事を預かつて支配人の代りと務めてゐながらに吾儕等兩人の影になり深切に能く執成て助成て成て下さるか萬に一ツの謔言がかなふまいものでもなければ如何ぞ然して下さいと共に頼めば不肖無性に「清吉さんなりお園なり共に吾等へ手を下てお願の事なれば否といふでいなければ



彼嚴酷やの姑御での末始終の治まるまいから成ふ事なら互ひに此際で離れてまをふたが
宜たらうかと吾等のおもふが二人どもに氣を揃へて詫て見やうとお思ひなら四五日の處の
預りませうが的發障とした返答もなく延辨愚察理と捨て置れて却て吾等が迷惑なれば待
ても沙汰のなぬ日に如何に困窮てのやうともお園の實家へ歸しますぞ「底の所の吾等も
お察しやして居ますから毎沙汰なしに致すやうな不實な事のござりませぬ僅三日の其間だ
「さういふ議定であるなれば今より本所へ行ところを路を違へて吾等のうちへお園を連て
参りませう「御迷惑なお願ひを斯う聽濟で下されば何かに附て都合もよき有難うござりま
す「うんなら必ずわび言し廿日までには吉左右をと言葉をつがひて茶店を出わかれて左右
へ歸りしより清吉の旅中にて盜難に遭たる由を兩親に語りしが留守にお園が去れたる事
初て聞たる如く舉動で驚き歎き養父母が信仰なる日蓮宗の講中にて親しく往復し近邊の老
人達へお園がわびを頼て成就する日を待て養母の彼是拒むにより講中達も發言うねて一日
々々と過すうち叔母に約せし廿日の晩の黄昏過ぎ頃までも清吉の音便あられればお園の叔

母の家に在て暗き火影の獨居に手傳針の持ながら手に附かぬる縫物の糸より細く身の末
の如何にやらんと考ふれば夫婦の縁も淺草の鐘の二更を告にけり

○ 第四回

壽町と今いへる昔年の堀田原を開して淺草の塙末なる叔母の寺へ頂け置しお園を誘引
出したる清吉の手に手を探て忍ぶへ我家の門ながら廿日八間を便にて内の容子を立附とも
知らぬ支配人三平の兩手を組で溜息とつく／＼困る家内の苦情手代わ向ひて聲をひそめ
「若旦那清吉さんい又今夜も歸りが遅いが若の内儀が知られてから家おんどんと尻が据ら
ず商業の事も等閑にして何處やらと駆廻つて氣を揉でござるゆる帳合も何もかも己一個で
手が廻らぬが噫是もまた無理ともいへぬ聞は今夜講中の衆が五六人集つて此の老人夫婦
をよびよせ若内儀の戻れるやうに詫とするとの事であるが十が八九の六ヶ敷からう其仔細
の或人の媒酌で何方かの屋敷に興業を十四の時から十年來つとめた女が若旦那の男振の好
のを見込に百五十兩持参して嫁に來たといふに依り身どのが慥にはまり若内儀の氣が利

ぬの役に立ぬのと難辨つけて良夫の留守に去てしまひ思ふ通りに大かた成たを講中衆が詫
たどて慾に目のないお人もゑ異見に耳もゆるまゐと聞いて手代の膝をうち 其お話しに我等
も他から薄々聞きましたか此身代で百兩や百五十兩の持参金がなくて立ぬといふでなし
左のみ慾張る所のないに常々から氣に滴ぬ嫁を出して金が遣入ば出入勘定して見たら大う
うな利益もゑとさうく慾に眼が暗むで此騒動に成たのさうなが情々慾の怖いもの殊にまた
大旦那の善良人過るもゑ大内儀が喧ましいのも知てるながら制されず否はや傍に見てゐて
も憐れやうて腹が熱る「ア、之そんなに大聲で旦那を勝るものでない今撞たのハモウ亥
刻なれば挑燈を持って夫婦の御迎に行て来い又運なるとハ内儀のお白眼を頂戴するぞ疾
くく」と急立られ戸張挑燈點しつ、手代の迎ひに出行ば影死られと門に立清吉お圍の
を小隠れ店のを遣返し「今の話しを聞やつたかアモ慾張た養母さま百五十兩の金もゑに
汝を去て又已に再嫁をいさせやうとの餘り薄薄いなされ方」如何に實の子でないどて俺も
飽れもせぬ中を割て歎きをかけさせて自身の榮耀に老やうとの情ないとも非違とも鬼より

怖いといひかけてワット計に泣入る聲と夫と曉りし三平の密々と戸を明てお圍さまでいご
ざりませぬか「エ、と駭然飛のけば「ナ、若旦那も一所か憐れ今夜ハ夫婦どもお留守
の事でござりますればアア此内へど招入れば「久し振で此内へ遣入られるのハ嬉しいが今
夜のお詫が済ばよし左もないうちに姑さんのお歸宅があつたなら如何様な苛酷に遭やら怖
くて内への如何しても「イヤくお圍さういやるな今宵の詫が適いすいと互ひに覺悟とし
てゐれば二の口村の淨瑠璃にも死バどて故郷の土と忠兵衛がいふでないか汝も己も此家
で生れた者でいなければも縁あつて来た金井屋の店へ一端立戻り夫婦揃つてそれから先は
「成ほど夫もは尤もそんならば三平さんのお詞に従つて「サアくお上りなされまし實の
は夫婦なればどて往來に立てゐて話せば人々怪みますから大は夫婦のお歸りまで氣遣ひな
者の居ませぬが寛りとお話なされませ「イヤ最う何から語ませうやら三平さんの心切の
是まで厳しい姑さんの蔭になり日向になり爲を思ふて下さりますか禮の辭に盡されせん
が今門口で窺へば百五十兩の金ゆゑに吾儕を去て何方からか美しいお嫁子を入るとあれば

良人に向何よりの幸福ゆゑ然いふ事なら吾儕一人が死さへすれば送すむもの「エ、是れ
 老たりお園さん今我等の話したのと立聞して、ござりませうが及ばすながら三平も店に
 斯してゐますればお姑さんごのやうに横に車を曳うとしてもろんる非道いさせませす又
 若旦那も貴嬢を除て外から嫁をおもらひなさらう詰らぬ愚知に思ひ追つて短氣な事となさ
 るなと諫る折から門口へ立歸り來
 る夫婦を先に講中四五人動也々々
 と後に從ひ入來ればお園の脱口を
 失ひて「コリヤ大變だ如何せうと
 周章さわげば三平の氣轉を利せて
 お園の手とどり「は窮屈でござ
 りませうが暫時の間ご此中へと納
 戸の傍の押入へ身と忍ばすれば蒲



吉のお園が脱し履物と袖に包で狼
 狽つけば三平は笑ひながら「袂へ
 入るわけにも行まいお園さんのゐ
 る押入へ一所に入るがよからうと
 指圖するうち門口を烈しく叩けば
 清吉と三平の眼をこすりながら格
 子を明て出むか「へエお歸りで
 ござりませうたか兩人話をしてゐな



がら遠俯向てとろく致して愕然しましたと詫れば主人金糸もん「チ、嘸眠かつたであら
 うと勞ふ傍から養母のお廣が「チャ清吉も歸つてゐたか吾儕等の留守ゆゑか今夜の大どす
 且かつたのト味にからむで尻目に瞋めば講中達の異口同音に「息子どのも家にゐてか今夜
 我等四五人で雨親にお話をする一件があるに付て此處に貴君がゐりては些面倒な事

もあるからモウ一時は近邊の講釋場へでも行てござれと云は清吉頭を掻きお園の事の心に悪れば立兼ゐるを三平が「心遣ひのあらふけれ私此處に付てぬれば講中衆の詞にまかせ暫時の間だ疾く」と眼で知らせつ、急立れば彼と是との意を汲わけ跡に心のこれども詮方なしに出でゆく

○ 第五回

清吉に席を避させたる跡に講中口を揃へ「是まで参る道々も御夫婦方に願ふところは我等が無理かりしらねども嫁の姑を見倣ねバ内の世帯の出来ぬは必定清吉の、留守の間に去らる、程のとあればお園さんが悪いには重々相違のあからふが金ももんさんの此通りの結構なお人なれば私共が面にめんじて一端の元の通りの夫婦にさへして下れたら又おひくに異見を加へ此方の家風に滴やうにしませうほどにナア御内儀「コリヤ次郎兵衛さんの能い御推量金ももん御覽の通り佛様同様の結構人でござりますから悴の留守に嫁を去たの此母の一存でした事おなた方のやうな御身上の御嫁子さんにの好かもしれねど僅に二箇り

三個便ふ舖も小さる小裂屋の女房の飯も焚水も時々汲ねばならぬに木綿物に着たがらす鼻紙も漉がへしは臭いといつて半紙をつかひ私等の香華院の勤化も三兩ど纏まつての太儀だと思ふのに五兩以上の櫛笄で娼妓か遊者の腐つたやうに狭い所を引摺て歩行れるに困さるといへバ次郎兵衛詰寄り「何處を聞ても何から何まで揃つた女の滅多にないもの私共の嫁などい階分信に働けど字の書ぬのが一ツの紙くれこれを考へたら如何か一應に辨を交るくの詞を聴入れ「お廣は何と思ふか知ぬが講中衆が是ほどに仰しやるものとむざざと採用ぬも失禮あれば汝が勘辨されるならば「イエー私に勘辨をしるといふならばしませうがお園を再び家へ入れれば此身上が保ませねば講中衆の前へ對し入ねばならぬ嫁なれば私を先へ離縁して夫から先の御勝手次第マア私私私の去状から先へ渡して下さいと斷然いれて金ももん兀天窓を掻きから「只今お聞なざる通り四十年來つれそひました女房と捨て嫁を入れれば仕馴た家事も立難し夫でい却てお園の爲にも成ますまいから清吉が如何でもお園の事ばかりの思い切れぬ者あらば不了箇でも出さぬため清吉ぐるみ離縁して何國の

果でも夫婦中よく添とげさせるが父親の慈悲たらふかと存じますれば、寧ろ二人を離縁せしめ、せうりれに付て、コレ三平一寸こ、へ来てくりやれ、「へエ」私に何の御用が、「イヤ用といふの外でもない十余年來養子にした彼清吉を去からん今日から汝も家への假ぬサア其置れぬわけといふの金井屋の金右衛門の甥の三平に跡しさを譲りたい其爲に悍夫婦を追出したと云れて、面が立す又清吉が買家へもひひわけが相成ねば無縁の他人を入るるとも親戚に跡と繼せぬ証據に氣の毒ながら今日限り引拂て貰ひませう、「若旦那が御座ればこそ何かの事を相談し勤めてゐられる御座れば速くに宿へ下つて又他に奉公口を探しませうといへば次郎兵衛頭と振、「ア、イヤ、金ももんだの養子を離縁したればとて甥と直すと極りもあるまい店を任せた息子どのと出した擧句に家業に馴た三平さんまで歸したら差當つて明日から不都合でござらぬか入らぬ義理を立すともお園さんの事に係らぬ三平さん其儘に店へ置たがよからふが、「然仰しやれば其通りらんなら仰に従つて三平出るに及ばぬぞ、張合もなき好人の詞に居合す講中の目と目と見合せうち笑ひ、「夫婦ともに

離縁するも極つたらへ、我々が長詮議の無益の相談サア、くお暇いたしませう清吉どのが歸られたら宜敷く云て下されとて、憂さばりも暴々しく皆うち連れてかへりゆく跡見送て金糸もんの溜息つくく、打まはれ、「折角口をさいて下さる講中衆への氣の毒ながら家業の上に換られぬ餘り心配した故か大ぶん肩が凝て来たぞれ、寐酒を一口やつて平臥ませうか、「ア、お廣、「清吉ぐるみ追出して、些不都合な事もあれど雨降て地かたまるといふ譬もありますから又善い事があるかも知れぬ何かの事の相談の興でゆるりとしませうと老人夫婦の立て行は門の外より押明て入る清吉の面を見て、「ヤア若旦那か、「三平さんか近處へ行くと小尻し委細の容子の立聞したがおその一人と離縁して、己も此處には居られぬ時宜と無分別な氣も出したが夫婦一所に去れ、バ天秤棒と肩へあて、塙末の長家に細々にも如何か暮してもかれやうくら却て夫も氣樂であらふ今夜だけでも戸棚の中へ隠しても置れねば近所へ止宿してもらふ積りに、輕で来たれば遂其所まで一寸私が送つて來ませう、「成ほどそれの能い御思案おそのさんの御御窮屈でありましたらふと突と立て三平が次の間の押入の戸と引

明れば此のろも如何に戸棚のうちに影も見ゆねば二人の駭然「ヤアいつの間」これの
 くど共に呆れて立ぬたるが「モシ若旦那この空戸棚に紙へ短く書たの正しくおそのさ
 んの遺書」これを見せなと行燈の火を挿立て讀下せば「一筆書のこしまわらせ候戸棚の
 内にて委細うけたまひ候へば吾身ゆゑに清吉様で御離縁に成候ての相すみ申さず候ま
 、兼々の御やくそくに其に死ぬつもり候ところ思ひ諦め此身一人にて川へ沈み相果候
 間だ御母様の御意にかなひ候御
 内儀と御むかへ睦ましく御くら
 し百万年の御壽命すぎ候後未
 來にて御目もじのうへ只今の苦
 しみと昔詰りにいたし申べく候
 此よしと本所の實の母様と淺草
 の叔母さまへもよろしくは傳へ



亡後の御回向ねがひまわらせ候
 未だく申上たきことハ數々に
 候へども死といそぎ候ま、あら
 くかきのこし參らせし
 清吉様りのより「ヤアく是ハ
 大變くマア如何したらよから
 んど清吉の立つ居つ歎けハ三平
 尻はせ折「此遺書の墨の跡もま
 だ乾かねバ遠くへ行まい若旦那
 と手を分て此裏河岸の兩側と探してお止申ませう早くくと急立て舖の締も明放しに二人
 の戸外へ走り出ぬ

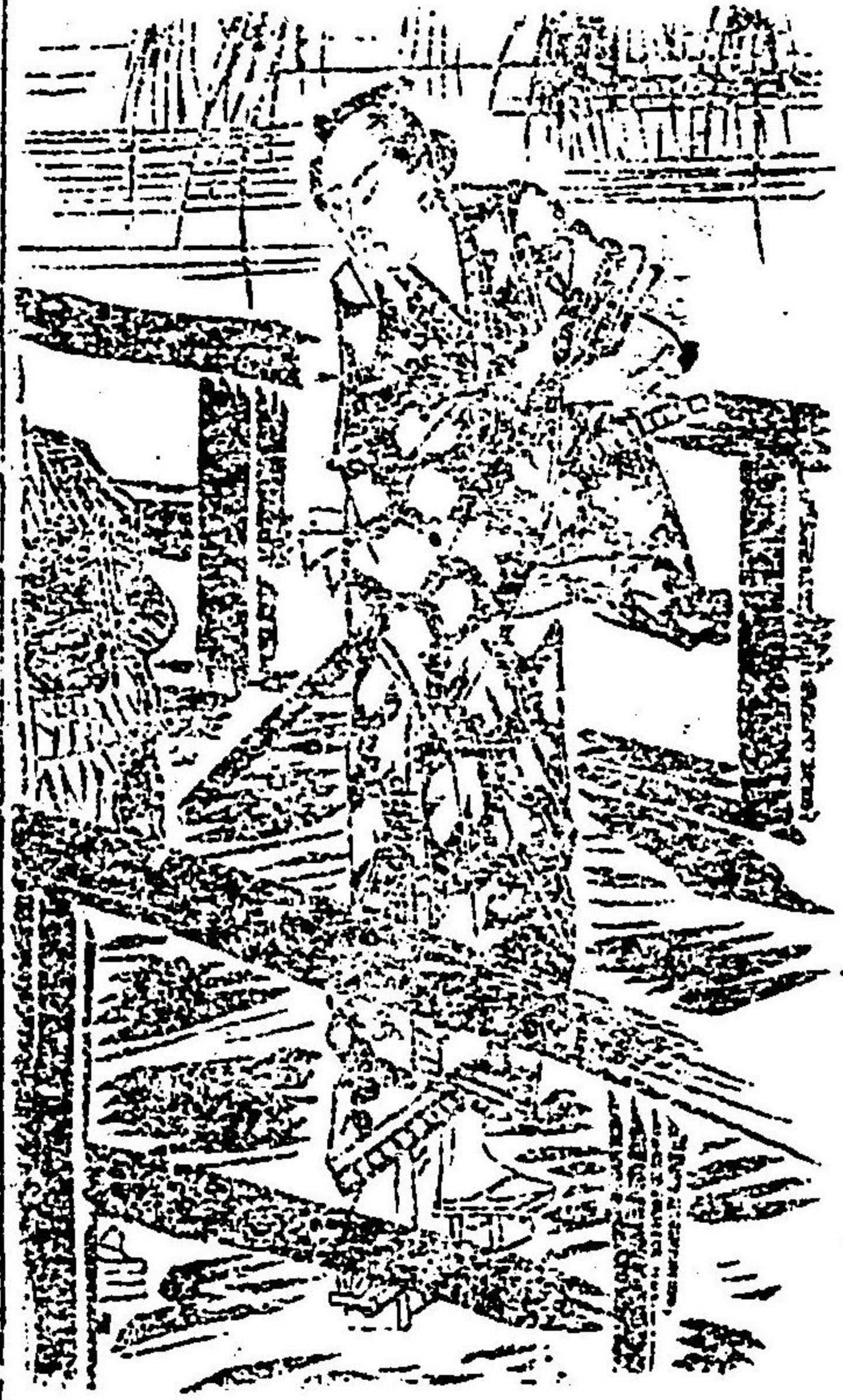


○ 第六回

丑三過る半輪の月、西岸に落か、りて往來の人の跡と絶し、見ぬ星の水に澄む影、深川の万
年橋より身を遊しまに飛込むと覺期のおその涙ながら小石を拾ひて袂に入れ、欄干に手
かけて南の方を望みつ、「今死る身で彼是といふのも愚痴の限りなれど、倦も飽れもせぬ夫
婦中を我儘に引裂て金のある嫁子を入る其高懸から良人まで離縁となつたも、姑御の苛酷い
了簡ひとつから細い烟も立兼る實の母さん、叔母さんの家にか、つてゐた所が妊辱な體でい
つまで座食してゐるわけにも行ずとあつて他へ置かねた此身の不運不仕合せ、姑御への
面わてかた、裏河岸へ身を投やうと思ふたなれど、生憎に往來の人の絶ぬゆゑ、遂うか
ど夜路を走り、永代橋も渡越し、今此橋が最期の場所とて、角ても捨る身、今更惜みひせぬけ
れど、胎内にやどした此嬰子を闇から暗へ遣るかなし、此兒ばかりを如何かして助ける工風
のゐるまいかといふ操言も、兒を思ふ夜の鶴さへ千年の齡のあるとさくものを橋の名までも
万年の龜の壽命に、わやかりて幾未長く榮ゆよと言へば、親が諸共に死ねよと言ひ、情ない非道
の母と怨まふがなまじいに生ながらへて、強面悲しい怖し、姑の無理を聞きより、筆のこに、此

川へ沈んで浮世の苦とのがれ、蓮の臺と半座わけ、未來で父御に會せんと返らぬ言と、喃々と囁
て、暫時泣まづみしが、何時まで斯てゐるべきぞと身を振起し、淺草の方に向ひて手を合せ、「日
ごろ信心し奉つる大慈大悲の觀世音さま、親子が現世の苦を遁れ、未來の西方極樂へ導いたま
へ、南無阿彌陀佛くと念じつ、身を踊らせて飛んとする背後に、拔足さし足して、始終を立き
く一個の男が、此時おそのを抱とめ、「ママ待つせる是女中、無分別にも程がある、急すと心を落
付て先己がいふ言を聞な、「何處のお方が存じませぬ、死ねばならぬ突つめた仔細があつて
の事なれば、如何ぞ放して殺させて、「ハチサ仔細のな、者が可憐命を捨れし、まゝが死どの婦
人の狭い了簡今も、ふ不同語をさけ、身ひとつならぬ、大事の躰、拾やうといふ心得違ひ、如何な
難儀に逼れば、とて忍べられぬといふ事、いな、管家へ送つてやらうから、歸つたらうへで、熱々と思
案をまかへて見たが、よからうといふ、いへ夜中に、駈出した宅へ、阿容々々歸れも、まゝい、心當りの
家があるなら、其處まで送つて、遣たうへ、袖ふりあふも、縁どかいへば、如何か話しの纏まるやう
に相談に乗ても、やらう、「通りが、りで見ず知らずの貴君様さへ、胎内にゐる小兒が、大事と仰

しやるに親が殺すは道でない事と唯今曉りましたれば御異見に従つて憚りまでござりませぬが實母が本所の原庭に獨暮しで居ますれば其處まで送つて下さいまし死なぬ心に成ましたら遠に夜道が怖くなつて獨でいぬかれますぬといへば彼人うち笑ひ「さてく狭い婦人の了簡死ぬのを思ひ止まつたの異見の申度もあるといふもの委細の話しに道々聞うサア先へ歩行など敷くおりのを慰めつ、案内させて原庭の母の柩へ趣きけり却て説清吉と三平の靈岸島の最寄なる川岸を走りて這許彼許とおその、行衛と尋ぬれどかひくれ見えねば因じ果東の天も明放れ稍人面も見ゆるころ榮久橋のうへにて行會ひ「オ、三平か」若旦那か今まで諸方を捜しましたが「己も方々



駈廻つたが「二人ともに影も見ぬの大かた遠くへ走つたらうへドブリとやられた者と見える今から何處を探してもモウ手後れでござりますれば一先お店へ立戻り其筋へも届にやならず夜も明たれば諸方から出入の者とよびあつめ御死骸なりとも捜させませう



「如何した因果の寄合か身ひとつならず腹の兒まで一所に沈めてしまふと噫可哀さうな事をしたト力なくく二人は涙ながらに立歸る向ふの方より隣家の丁稚は色青さめて駈來り「モンお隣の若旦那番頭さんも御一所か御前方が留守の間に大變が出来して金井屋さんでい亂ち騒ぎ近所の店の衆までが惣がりでお前達の出かけた先を尋てゐるからせ

ア、早くお歸りと胸うち叩いて息を切りいふ口上も絶げなるに清吉と三平は何事やらむと愕然たり

○第七回

後期の恨を八幡鐘にかこち恍惚た心意氣を潮來節に開せし昔日辰己の繁昌の客の山なす山本の奥の一室に清吉がおその一側へ摺寄て「賈しい暮しの實母を養ふ爲に深川の遊妓に出たと内々の知らせに付て執ものも取わへず来て待たことくゝゑらい退屈させられたハエ「吾儕もおまへに會たさに今朝早くから支度して出やう」と思ふところへ市原さんが大醉で這入こひでの長座味にからひだ口説文句が思でく堪らぬいから漸くはづして來ましたのさ其市原とかいふ人の聞たやうな名であつたが「おまへの最うお忘か市原さんとは万年橋で身を投やうとした時に吾儕を止て家へ送り始終の話しを聞うちに壁の汚れや壁と障子の破れを見て困る容子を察してか十兩の金をお母さんに恵むで種々異見を加へ懐胎といつても二月三月まだお腹さへ目に立す身を穢せといふ業でもないから遊妓に成たらよから

ふと心切にす、められてコレヤ能い思案と心づき文ておまへに相談のうへ此深川へ出た初日から市原さんか揚詰同様おまへに切てさへしまへば實母ぐるみ田舎へ引とり身儘に榮耀をさせてやらうと面見る度にははれるに殆ど困りますすが如何か詮方はありませまいかね「それは嘘かし迷惑だらふがママ己が言も聞てくりやれ汝が戸棚へ書置を遺して内へ出た夜に三平どもく近邊の河岸をあちこち捜し歩行て榮久橋へ來かゝると隣家の丁稚が迎ひに來て大騒動があつたといふから驚いて歸つて見れば汝の跡を追かけて三平と一所に出るとき心が周章で門の戸を明放しにして駈出たれば締のないと僥倖と泥坊が二人押し入り身投騒ぎで家内がまごついてゐる中で金の在所をいばぬかと白刃を指つけられたれど強慾な養母の是の彼の是の拒むうち威しに突山す刃先が當つて頬から肩へ傷を負ひ倒れて叫ぶ養母の聲に駭き隣家から人の出かける容子ゆゑ泥坊は庫へも這入らず帳簿に有合ふ三十兩を引攫つて取出したが身投騒ぎで手負騒ぎで家内中轉回かへるほど大どた／＼をやつたゆゑ其此雜に取紛れて己を離縁の一件も持參附の嫁人の話しも立消同様に止に成たが

うのい大かた水死した事と思つて本所の家へ使ひを出したの其日の午後小僧の歸るを待う
 ちに無事てゐたといふ便を聞いて大安心をしたうへに鬼と異見の養母も汝が死に出かけたの
 と體の傷とに弱つたうして従前のやうに驚しく小言も云なくなつたから此容子でい半年
 か一年ばかりも此土地に遊妓をつとめてゐて呉たら旨く機嫌と取直し元の夫婦になれやう
 かと思ふ目的が附たゆゑ委しい事
 かと先達て書翰で述て遣た通り己も
 また金井屋に居据つて一幸防して
 見る氣ふ成たから短氣を出さず
 時節を待て如何ぞ幸防してゐて
 んるよ一吾傳が死ぬ氣で駈出した
 のと盜賊ゆるゑに養母さんのお心が
 おひく直るものなら物怪の候



伴藝妓かせぎをしてゐれば赤兒の
 生れたとて何方へなりとも乳養に
 やり女夫になられる時節をば樂み
 に俟ませうが爰に困つた一件の今
 もいふ市原さんが附つ廻しつ口説
 くのと清吉といふ良人のあるは御
 存知の通の理とて斷つても聞入な
 く素より良人のある者ゆる横戀落
 の道ならぬ事とは百も承知なれど底が所謂煩惱心と考へても思ひ切られぬ己も男の數な
 れハ一端斯といひ出した詞をばんやり消ていしまへぬ唯の一夜で思ひ切から色よ返事を
 してくれろ夫が否なら腕づくでもと笑ひながら云れるのも何だか氣味が悪らうへ何營業か
 知らないがお金のあること夫のく吾傳等へいふ迄もなく茶屋船宿の奉公人まで纏頭の



よいには肝が潰れる其光ゆゑふ事を聴ぬ吾儕が無理のやうに誹謗れるの耐へもすれど
此景状では未々には強姦の事でもされようと思へば市原さんのお座敷が怖くつて思なれ
ど一方ならぬお世話にもなりお母さんへ恵まれたお金のわづか十兩なればお返しは易
れを捨の命を引止て異見をされた其恩のお金で報へるものであるし異だ御方に想ひれて困
つた機會に陥つて氣が氣でない吾儕の胸を推量して下さぬと涙もろきは婦女のつね清吉
が膝に泣伏バ一何に成ても苦勞の絶ぬが己と夫婦の因果同士人の七轉び八起といへば頼て
辛苦も消失て又よい春に遭ふ日もあらふ併し其市原さんは大恩のある人なから恩を着て束
縛に挑くといふは尋常の男らしくもない所置殊には何を營業ともなく充分に持てゐて金遣
ひの荒いの何だか怪しい人である二人が密々語りあふ折から戸の方喧すしく夥多の
藝妓太鼓もち茶屋の女房船頭まで十人ばかりを引連て此山本の庭口より動也くど入來り
二階の廣間を明させて酒池肉林の食樂に散財めく客の當時辰己に一二を争ふ俄大盡上總あ
たりの産と聞く市原鬼三といふ男新妓のおそのが出た日より黄金を散して挑めども金で

動かぬ堅固の操を義理づくめにて破らせんと今朝しも訪たる中裏の栖を座敷にかこつけて
脱しおそのが跡を追ひ確に此家にゐるといふ辨間の注進に因て一層花美をつくしたる大催
しの離會を下座敷に潜みゐて曉るおそのの山本の家婢にうれと含まして疾に歸りし体にも
てなし座敷へ面は出さねども怖いと思ふ人の聲に身も震ゆる、ばかりなり

廣告

宇田川文海校 旭亭芳峰表書
鳴々道人稿 仙齋年信申書
天下無双入傑 汗血千里駒
海南第一傳奇

右者天下無双の豪傑と世に雷名を轟し王政維
新の事に關つて大功ある土佐國の奇男子坂本
龍馬君の實傳遺曲を輯録せしものにて其事の
奇其文の妙又以て天下無双の傳奇といふも決
して過言にあらじ看官請ふ一讀して予が言の
虚ならざるを知り給へ

西京發賣所 寺町 發々堂本店
東京發賣所 木挽町 萬字堂本店
大坂發賣所 本町 萬字堂支店

江戸花俠客長兵衛全一冊

此書の世に知れし播磨長兵衛が麾下の士水
十島左衛門に抗敵して斃たる勇しき傳記を諸
書と纂考し實録に據て詳細に著したる珍書也

諺紫樓種彦校閱 此花亭義澄圖畫

小夜衛濱の松風 全一冊

二世種彦先生の門人東京の華彦君が大坂此花
新聞社に寄て客年來陸續掲載きて高評ありし
水對家の騷動にて専ら勸懲の理を正せし御伽
草紙あり

宇田川文海編述 旭亭芳峯畫
天明 騷動伏水義民傳 繪入三冊讀切

右は有名なる文珠九助其他伏水義民等が事蹟
を詳細著したる傳記にして民權家の必讀すへ
と繪入讀本なり

靜岡三保の浦風 全前金廿五錢

右の俠客三保の松烈婦の濱の物語を面白く綴
りて繪入讀本にまで婦幼方の瀏覽に至極宜
と陸續注文を載ふ

曲亭馬琴著
南里見八犬傳 初編近刻

男女交合得失問答

上篇目次 代價十五錢郵稅二錢
○生殖器論 ○妻妾として関守らしむるの
法 交合の際精液早く漏れて其情と盡す能はざ
ると防法 ○身体虚弱にして精液少きを治する
法 ○小女と成女とを識する奇法 ○隨意
に男兒を擧げ女兒を生む法 ○淋病の説及び治
法 睡眠中精液漏出の原因及治法 ○陰莖の勃起
するを防ぐ法 ○精液を増多し精虫を生せし
る法 ○婦人の月經不順を治する藥方 ○男女が
合の際精液早く泄れて快味を盡すと能はざ
るを防ぐ法 ○生兒の父親に肖或は母親に肖の理
右御注文の際郵券代用を諾す

發兌元 京都寺町通御池下ル東側 叢誌屋本店

宇田川文海校 旭亭芳峯畫
淨夢の枕 定價八錢

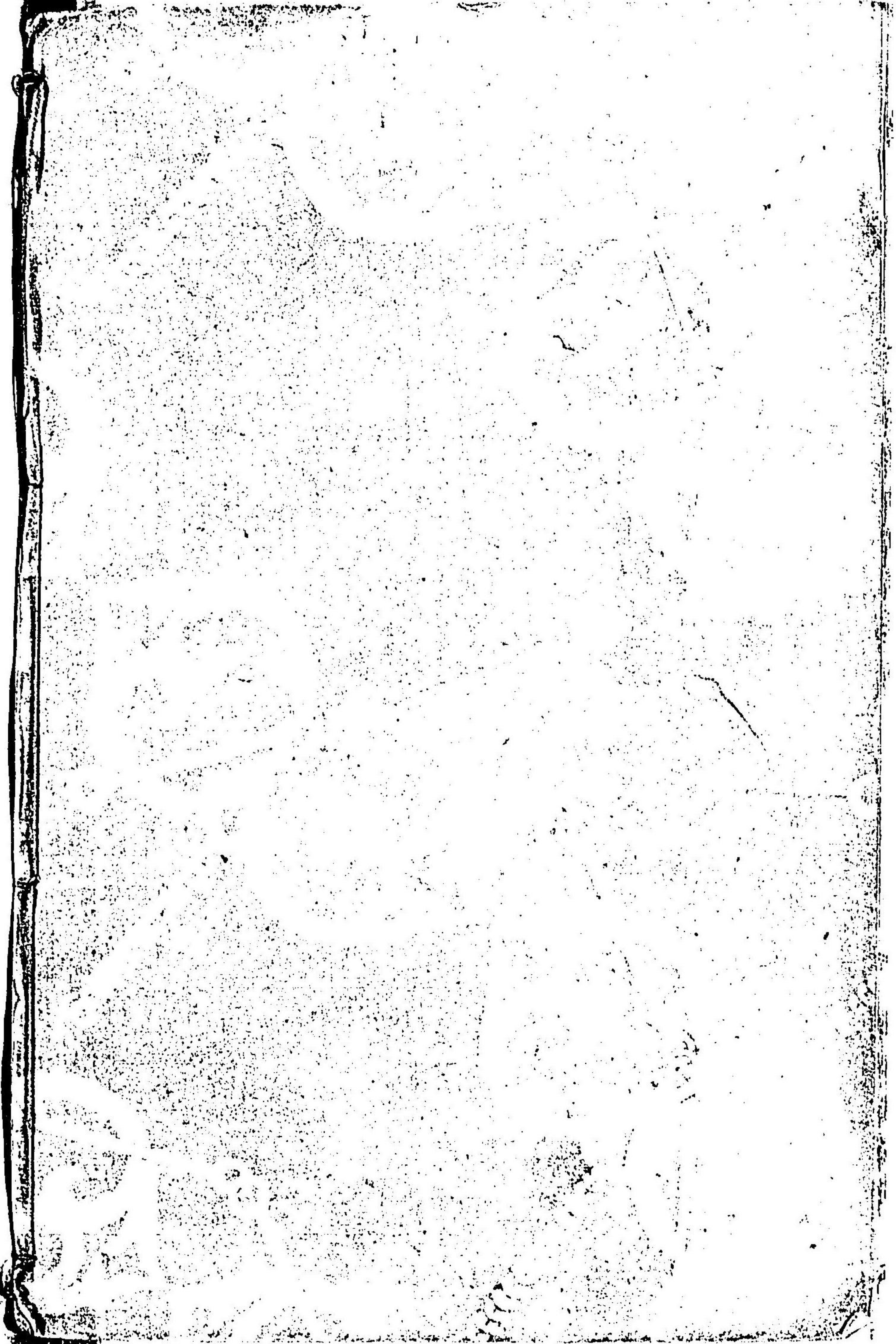
石は一回朝日新聞紙上に掲載せしより江湖の
喝采と得たる近來の續物語の中に尤も
味多きものなれば世の小説愛讀の諸君就めて
購求あらんとを請ふ

曲亭馬琴編 初編發兌 定價六錢 十冊前金五
全傳 南柯夢 付貳錢内半額弊店持

此書の筒井順照楠を切を始めとして木村
の怪より半七三勝の奇偶を説き然も艶曲淫奔
の脚色を籍りすして古今人情の意を盡し哀れ
に面白き物語なり

山亭馬琴編 鎮西八郎 椿説弓張月 初編發兌
爲助外傳 定價六錢

柳亭種彦著 此花亭義澄圖畫
三巴里之奇説 全一冊
定價十五錢○全國郵稅四錢



特42

117

